

2010年(平成22年)9月30日

病院長からの一言 ～禁煙パトロール開始～

弘前大学医学部
附属病院長 花田 勝美



今回は内容が盛りだくさんです。これも附属病院が全学のご支援のもとに活発に活動していることの裏づけです。第56号でもご紹介した如く、将来、医師を目指す高校生を対象に、外科手術体験セミナー「君もかっこいい外科医になってみないか」が各地で開催されています。その結果、本学の「教育に関して優れた業績を上げた教員」として本年8月2日、代表者である袴田健一教授(消化器外科学講座)が表彰されました(写

真1)。今後も、地域学生の早期啓発を継続させていただきたいものです。7月28日、全学的な学内クリーン・デーにちなんで、附属病院では「禁煙パトロール」を実施しました(写真2)。おそろいのジャンパーを着用したパトロール隊が病院周辺のポイ捨てタバコを拾い集めました。これは今後も継続し、回収タバコの本数を院内に表示する予定です。初回の回収タバコは1,463本でした。附属病院と医学研究科、保健学研究科を結ぶ念

願の渡り廊下が相次いで完成し、8月2日には本町渡り廊下、8月9日には在府町渡り廊下それぞれ渡り初め式が行われました(写真3)。これにより、天候に左右されず迅速な移動が可能になりました。ご尽力いただいた関係者の皆様に感謝申し上げます。

さて、今期も多数の方々を本院を訪問されました。7月7日、七夕の日には厚生労働副大臣細川律夫氏(写真4)、7月22日には青森県議会環境厚生委員会の一行がおいでになりました。熱心に高度救命救急センターやヘリポートをご覧いただきました。細川副大臣は患者さんがぶら下げた七夕の短冊もご覧いただきました。視察に先立ち、附属病院の現状や要望を聞いてもらいました。地域の支援を受けた弘前大学の高度救命救急センターには全国の関心が集まっているということでした。

なお、細川律夫氏は、9月17日の組閣で厚生労働大臣に就任されました。

(平成22年9月22日)

各診療科の紹介 【高度救命救急センター】



高度救命救急センターは、7月1日に本格稼働を始めました。開設前年の平成21年、病院長諮問委員会でも高度救命救急センターのあるべき姿が議論され、地域の医療機関が手に負えない重症傷病者を中心に受け入れ、救急医療の最後の砦を目指すこととなりました。そして医師は、院内の救急患者の多い診療科に病院長が派遣を依頼し、救急・災害医学講座の医師4名と合わせて計14名の医師が参集しました。看護師は集中治療室、各病棟、そして新規採用など計38名、事務職員をも含めるとセンターの職員は総勢55名を超える大所帯となりました。センターの1階は重症傷病者の初期治療を行う救急処置室、レントゲン・CT検査室、血液ガスなどを測定する検査室、カンファレンス室、当直室などがあります。2階には10床の救命救急病棟があり、地下には緊急被ばく医療に対応できる特殊処置などがあります。そしてセンター開設と同時に外来診療棟の屋上には、照明装置と融雪装置を備えた屋上ヘリポートが設置されました。7月2日には、白神山で倒れた男性を秋田県の防災ヘリ「なまはげ」が吊り上げ救助し来院しました。青森県の防災ヘリも岩木山での滑落傷病者や

大鰐の土砂災害での負傷者を救助し飛来しています。

この2カ月半の間、いろいろな重症傷病者が搬送されています。心筋梗塞、クモ膜下出血、交通外傷、墜落外傷、心肺停止、トリカブト中毒、ヘビ咬傷、クマ外傷、溺水、出血性ショック、敗血症性ショック、熱中症など。このような各種多様な重症患者さんが運び込まれるため、センター所属の医師だけの診療は不可能であり、院内の各診療科の全面的な協力を受けています。ほとんど全ての診療科の医師が深夜、休日を問わず幾度も呼び出しに応じて来ています。そして、センターの病棟に入院した患者さんを2～3日で各診療科の病棟へ転床させ、センターの空床作りに協力して来ています。また、センターが稼働してから放射線部、MEセンター、手術部、集中治療部、輸血部、検査部、薬剤部、材料部なども多忙になっていると思います。この場をお借りして心から御礼申し上げます。

今後はさらに地域に役立ち、医師にとってやりがいのある救急医療の場を目標に邁進したいと思います。皆さまの更なるご理解とご支援をよろしくお願い致します。

(高度救命救急センター長 浅利 靖)



▲写真1



▲写真2



▲写真3



▲写真4

ヘリポート離着陸訓練と運用開始

6月22日、外来診療棟屋上に完成したヘリポートにおいて、附属病院、青森県防災航空センター及び弘前地区消防事務組合が参加しヘリコプターの離着陸訓練が行われました。これは、7月1日の高度救命救急センター本格稼働を前に、傷病者の迅速かつ確かな搬送のために行われたものです。

浅利センター長をはじめとする高度救命救急センターのスタッフが待機する中、青森空港から飛来した青森県防災ヘリコプター「し

らかみ」は14時にヘリポートに着陸し、救急患者引継ぎ訓練、救急患者受入れ訓練、医師及び看護師が搭乗した離着陸訓練と、連続して3回の訓練がスムーズに行われました。

防災ヘリによる訓練が終了した後、引き続き、八戸市民病院に配備されているドクターヘリも青森空港を経由して飛来し、離着陸訓練を行いました。院内への模擬患者搬送の後、センタースタッフによるドクターヘリの機内視察も行

われました。当日は、天候にも恵まれ充実した訓練となりました。

8月20日には、平成22年度弘前市総合防災訓練の一環としてヘリの離着陸訓練が行われました。これは地震でビルが倒壊したとの想定で、救出された負傷者を本院のDMATチームが応急処置したうえ防災ヘリで附属病院に搬送するとの計画によるものです。DMATチームが同乗した防災ヘリは、弘前市岩木地区のB&G海洋センターから本院ヘリポートに10時



35分に着陸し、無事模擬患者搬送訓練を終えました。

本院がヘリコプターで救急患者を受け入れた件数は、9月10日現在8件となりました。地域の救急医療への貢献が今後ますます期待されています。

(文責：総務課長 黒田義弘)



弘前市総合防災訓練DMAT隊による搬送訓練の様子

「2010(平成22)年の夏は、本当に暑かった」と後世語り継がれることでしょう。9月に入っても弘前市の日中最高気温が33℃では、地球温暖化現象が身近な問題として実感される夏でした。全国を襲った猛暑の中、熱中症が多発し救急搬送患者数や死者数も過去最高だったそうです。しかも、死亡者の大部分は高齢者で、中にはマンションの一室で、84歳と77歳の姉妹が熱中症の死後1週間程度経過して発見された事件もありました。

今年の夏はもう一つ信じられない出来事がありました。年金不正受給から端を発した所在不明超高齢者が全国で相次いだ問題です。和歌山市では、江戸時代後期1836(天保7)年生まれ174歳の男性、青森市で184歳の女性などの戸籍が残っていたなどの笑えない報道が相次ぎました。「100歳以上の高齢者の生死が確認できない場合、法務局の許可を得て自治体は戸籍を削除できる。」にもかわらず、どの自治体もこれまで一度も行わなかった結果だそうです。

先憂後楽

猛暑の中の超高齢化社会



病院広報委員会委員
歯科口腔外科 教授 木村 博人

いずれの出来事も、自治体の行政の仕組みが加速度的な社会の高齢化に対応出来ず、あるいは一部の地域社会が根本的に崩壊し、超高齢者が社会に置き去りにされている状況の現れと思われる。昭和30年代、金の卵ともてはやされ「集団就職」と言って東京・大阪などの大都市に送り込まれた世代が今その大都会で孤独な生活を強いられています。それならば、経済至上主義の大都市で置き去りにされている独居老人をひと思いに地方自治体が引き取ってお世話

してはいかがでしょうか。昔の集団就職の反対ですから、「集団帰郷」を国家的事業として実施する計画です。例えば、「国の全額補助事業として、広大な岩木山麓の遊休地に北欧スタイルの集合住宅を建設し全国から帰郷老人を募集する。」なんて事を考え付くのは、応募者ゼロの場合を想像すると、所詮寝苦しい真夏の夜の夢でしかないかもしれません。

新生児集中治療室(NICU)本格稼働

2000年から現在の中央診療棟の周産母子センターに移転となり、NICU2床(未認可)とGCU6床で小児科・産科・小児外科医師が協力しながら診療を行っていましたが、ベッドが不足がちで長期管理が必要な児は小児科および小児外科病棟で引き続き管理を行ってまいりました。青森県の周産期死亡・新生児死亡・乳児死亡は常に全国最下位レベルで、これを改善すべく2004年10月に青森県立中央病院に総合周産期母子医療センターが開設され、県内の28週・1000g未満の児を集中的に管理する方針となりました。しかし、これらの児に起こりやすい消化管穿孔を含め小児外科疾患、複雑心奇形、重篤な母体合併症を有する症例については、当院で管理する必要がありました。昨今、周産期に携わるスタッフ不足と母体または新生児のベッド不足などが

ら、いわゆるたらい回しによる死亡事件がマスコミで大きく取り上げられ、2009年には厚生労働省および文部科学省から、スタッフ増員のための施策や国立大学でのNICU設置の義務化が決定されました。これは4カ年計画で2014年にスタッフ6名増員、NICU6床、GCU10床稼働を最終目標とし、昨年末から改修工事を行い本年4月から診療を再開し、7月に正式にNICU認可を取得しました。しかし、新生児専門医の確保の見通

しが立たず、実働としては各々3、6床で運用し、2014年までにスタッフの確保・育成に努力しているところです。医療機器も増えたことからとくにMEセンターには多大な負担をおかけしておりますが、順調に計画が進み青森県の周産期医療によりいっそう貢献できるようがんばりますので、今後ともご指導・ご協力よろしくお願いたします。

(周産母子センター副部長 尾崎浩士)



弘前ねぶたまつり

津軽地方の伝統行事「弘前ねぶたまつり」が8月1日から7日間行われ、弘前大学のねぶたま大学と地域住民との交流を図ることを目的として、2日、4日、6日の3日間参加し、昭和39年に初参加以来、連続47年の出陣を果たしました。

4日には小雨の降る中、附属病院構内において、小児科に入院中の子供達や保護者、医師、看護師及び事務職員等による「小型ねぶた」が運行され、子供達は太鼓と笛の音にあわせて「ヤーヤドー」と元気な掛け声を響かせ、津軽の短い夏の夜のひとときを楽しんでいました。

また、病院内では外来診療棟の待合ホールにミニねぶたや金魚ねぶたが飾られて祭りムードを盛り上げ、来院された患者さんにも大好評でした。(総務課)



がんサロン開設

がん診療相談支援室では8月2日より、悩みや不安を安心して語り合う事ができる「場」の提供と情報収集による主体性行動を促すために「がんサロン」を開設しました。

サロン内には専用の相談室を設置し、更に

- * がん冊子の無料配布(40種類) 国立がん研究センター発行の小冊子。
- * 書籍の閲覧と貸し出し(250冊) 闘病記・体験記を中心に標準治療のガイドラインなどの専門書、がん情報誌やサポート本、食事や療養に関するガイド本、「生や死」をテーマにした絵本やエンディングノートなど。
- * DVD・CDの視聴(36枚) 静岡がんセンター作成による治療や精神的なサポートに関するもの。

* インターネットによる情報の検索や閲覧

などを行っております。

サロン開設から1ヶ月の間に180名の方にご利用頂きましたが、それに伴いセカンドオピニオン外来やがん相談の件数も増えてきています。

ゆったりとした「場」の空間をいかにしながら、ひとりひとりの思いをじっくりと受け止め、思いやりと配慮ある対話を軸にサロンの充実はかっていきたいと思っています。

今後とも温かいご支援を賜りますようお願い申し上げます。

最後に開設にあたり、ご理解とご尽力を頂きました皆様方に心より感謝申し上げます。

(がん診療相談支援室)

七夕納涼祭り

笹の葉に願い込める「七夕の短冊」を数年続けてきて、多くの患者さん、ご家族の皆さんに喜んでいただけていました。

そよ風に揺れる短冊に涼やかさを感じ、日ごとに増える短冊に目を奪われていたら、ひよんなことから「宵宮」のように「露店」があったら、小さな患者さんが物凄く喜ぶのではと、心優しい看護師さんと子供思いのボランティアさんから提案がありました。それから、話はトントン拍子に進み、ヨーヨーとスーパーボールは調達スタッフが、屋外照明、提灯飾りは設備スタッフが手筈を整え、看護部と医事課が患者さんのお相手をする段取りとなりました。

七夕当日、新外来診療棟開業以来足かけ3年開かずの扉をこじ開け、テラスへ出店し、笹の葉、照明、BGMと完璧なムードで宵宮もどきをしつらえました。

夕刻、早めに夕食を終えた、小さなお子さんが、お母さん、医師、看護師に見守られながら、テラスへ集まってきました。

さっそく、ヨーヨー釣り、スーパーボールくわいに喚声を上げ、病衣が濡れるのも構わず、水遊びに無邪気に興じる子供たち、両手に持ちきれないほどの戦利品を抱え、ここに来られない友達に配ると目を輝かせ答えてくれた子、この情景を見守るお母さん方の温か

第57回全国国立大学法人病院検査部会議を開催

第57回全国国立大学法人病院検査部会議が6月24日、25日に弘前大学を当番校として弘前市内のホテルで開催されました。

会議には、文部科学省から、高等教育局医学教育課大学病院支援室の早川慶病院第一係長を特別講演の講師として迎え、全国43国立大学とオブザーバーとして防衛医科大学校から検査部長・検査部技師長の計89名が参加しました。

24日には会議に先立ち、本院検査部の施設見学が行われ、33名の会議出席者が参加し、本院検査部に設置されている各検査システムの説明に耳を傾けていました。

25日には、当番校である本学の花田勝美医学部附属病院院長及び保嶋実検査部長からの挨拶に続き、早川病院第一係長から「大学病院

における諸課題について」と題して特別講演が行われ、大学病院の役割・使命、大学病院の現状及び大学病院に係る予算等について意見交換が行われました。

そのほか、「検査部の諸課題と新たな展開」と題したシンポジウムが本学の保嶋検査部長を座長として、三菱化学メディエンス瀬戸山友一室長、岡山大学小出典男部長、群馬大学村上正巳部長、筑波大学南木融技師長、東北大学長沢光章技師長及び京都大学田中美智男技師ら6名のシンポジストにより行われ、各大学病院の検査部が抱える問題、取り組み等の活発な意見交換と質疑応答が行われました。

次回の開催は、信州大学が当番校となり、松本市で開催の予定です。



▲講演する早川病院第一係長



この人 No.5

本院の多方面で働くスタッフを紹介いたします。



耳鼻咽喉科学講座 教授 新川 秀一 さん

新川先生は、夫婦仲が良いことで有名です。毎年、院内のクリスマスコンサートの時期になると、教授のご自宅にお邪魔して「おでん」を頂きます。そしてひたすらお酒を飲みます(飲ませて頂きます)。おでんに入っているゆで卵の殻は、奥様の指導の元、教授が剥いていると聞いたことがあります。しかし、私たち医学部管弦楽団のメンバーはそんな事は気にしません。ひたすらおでんを頬張るだけです。また、噂ではバラを育てているそうで、学生の皆さんは、あの怖い先生が…と思われるかもしれません。僕もまだその現場を見たことはありません。

さて、教授は言わずと知れたヴァイオリニストで、大学生時代は母校のオーケストラでコンサートマスターをされていました。医者になった時に買ったと云われているヴァイオリンは、目が飛び出るくらい高いらしい。6年間、医学部管弦楽団で新川先生と一緒に弾かせて頂いた僕(チェロ担当)からすれば、怖いながらも面倒見の良い先輩のような方です。でも個人的に一番大切だと思うのは、どんな音を出したいか? 音楽への愛があるか? 作曲家のメッセージが伝わっているか? です。つい先日、この原稿のための写真を撮りに教授室にお邪魔すると、仙台でレッスンを受けて来たとのこと。常に上手になりたいという気持ちに、私たちも負けはられません。

(弘前大学医学部管弦楽団OB 内分内科・糖尿病代謝内科・感染症科 山形 聡)

い眼差し。

短冊にはお子さんが「チョコバナナが食べられるようになりますように」と、お母さんは「病気には絶対負けないぞ!」などなど、その強い思いを書いておられました。

病氣と闘っている皆さんの思いが叶えられるよう願わずにはいられない行事となりました。



【編集後記】

「ねぶた」が過ぎれば「弘前は秋」、というこれまでの常識を超えて今年は何年にもない暑い日が続いています。北極の氷山の崩落映像や大氷河の後退などの映像がしばしば放映されますので、これも「地球温暖化」の一徴候であると言われればすぐに納得してしまいそうな気持ちになりますが、地球温暖化は実は虚構であって、地球の平均気温は毎年下がりがつつあるのだそうです。むしろ南極の氷は過去30年の間に8%も増加しており、地球温暖化と、ましてその原因を二酸化炭素に結びつける説はエセ科学という論文すら目にしました。真偽のほどは専門家に任せるとして、この暑さなんとかして欲しいと願う毎日です。この南塘だよりが、しばしの憩いとなりますことを願っています。

(病院広報委員長 水沼英樹)